

家山何處天一涯、聞說信中稱絕險、丸泥一封本難期、將家豚犬假客氣、未運一敗此三垂、將軍家在古城下、門前流水帶餘悲、歸來下馬爲酌酒、臨風悵立一弔之

各吟社の正副長、禪僧の詩人

耐雲翁の後を承けられた信田淞北翁は、擊劔を善くし、又内村鱸香翁に學びて文才があり、殊に漢文に長ぜられ、永く稅務官として諸處に轉勤し、晩年松江に退隱して、縣下の墓碑誌を修せんとし、且奇談恠聞を得意の文章で記録されたが、後者は翁の歿後刊行された、文の奇は事の奇以上にある、詩は寧ろ餘技ながら、又朗々誦すべきものが多い。

舉男兒名曰孝

鄉書忽報弄璋慶、喜得家門更永昌、以孝名兒豈無意、聿修之業莫相忘

東京小西湖畔偶飲村上琴屋井川收軒兩兄

夜深風笛聽悠揚、無限情懷付酒觴、把手歡兼分手悵、京華虽好是他鄉

掛冠歸鄉

紅花綠柳弄晴暉、入坐春光燦照衣、行樂及時吾得計、衙門昨日掛冠歸

松崎水亭分韻

花雨柳風斜日天、翠巒朱閣半籠煙、松江不讓西湖景、濃抹淡粧看更妍

呈槐南先生依其臨水亭瑤韻

先生意氣劇淋漓、咳唾成珠万首詩、長仕聖朝趁鷓鴣、偶來湖國對鷓鴣、煙雲吞吐山皆動、波浪低昂帆乍移、勝會一場歡未盡、其如明日又天涯

現在は琴屋翁が吟社の盟主で詩も亦圓熟を極めて居られる翁の詩に曰く

送本田思齋

鴻爪印泥知幾年、平生飲啄跡如煙、他時若問舊栖處、夢在湖雲祠樹邊

畫龍

玉爪翠鱗隨手成、飛騰勢與墨雲爭、笑吾徒學屠龍伎、不及張家一點睛

時事書感

眼看世局幾艱難、一夜燈前思百端、市井窮人徒抱璞、草茅野客漫彈冠、李牛抗勢國爲累、蠻觸煽紛民不安、四壁峭風春尙淺、梅花帳裏夢魂寒、

孫手

削木如箸一尺強、上著小拳製異常、以之爬背中肯綮、快比麻姑鳥爪長、孫手々々呼亦好、或言麻姑是本名、老來隨身尤珍重、不問酒場與文場、賦詩一字難得妥、絕似隔靴搔痒情、

雖有麻姑無所用、手搔白頭搜枯腸

青垣吟社の盟主は大町桂月氏が山陰隨一の佳景と激賞された枕木山の華藏寺住職朝山宗恩師(大休)で、水谷虛堂氏が副である、宗恩師は又山陰隨一の詩僧で、彼の菅茶山にも貴んぜられた詩僧道光(聽松菴とも號し、書に妙でも有た)に追隨する、ものであろう、詩と其禪とは多く學修の淵源がある而して詩は極めて多作を避けて居られるから、僅かにその三四を左に擧げ置く。

奉頌登極大典

日之出處九光霞、天俾鳳凰儀玉車、漢使西來獻何頌、放勳難擬況重華

枕木山曉望次柏軒顏

天宇晴開大海東、醫王開茲置琳宮、日光菩薩應承勅、曉出雲霞五彩中

送松井龍吉君世界一周

不做壺公縮地游、唯期足跡遍寰球、曠原行過無人境、亂雨荒煙疑是秋
壯心誰策萬里游、太勝書生弄野球、海上歸來遲亦好、觀潮養勇最宜秋

賀柏軒松井君拜受天盃

絕代文豪老柏軒、可無氣魄壓乾坤、當知筆底剩功業、長與御盃千載尊

初三月

天門雲歛處、仙掌露霑時、三界未全照、九州唯僅輝、金精何淡淡、冰彩亦微々、龍耀片鱗現
兔奔孤爪歛、磨鎌上韓筆、學翁入唐詩、鉤印碧潭水、弓懸丹桂枝、范翁搖玉玦、鏡婦掃蛾眉
潘子暫開室、阮生聊卷帷、運行應有路、變化欲成規、鴻雁聲猶在、梧桐影已移、思君不可見
棄我將焉之、秋冷長安夕、征衣擣者誰

高橋菊徑翁は初期の師範學校出身で、永年松江市長を勤續され、南畫にも超然の作があり、市に於ける長老である。詩に曰く

詣華藏寺

伽藍高構翠微巔、今日登攀了宿緣、喜我參禪清欲徹、白雲深處禮金仙
山氣陰森月色澄、千年寺在白雲層、恠禽叫斷禪房寂、坐待深龕出定僧

三徳山投入堂

古刹靈蹤扶杖探、崎嶇險阪鎖層嵐、堪驚誰借鬼神手、奇構峭厓安佛龕

美保關

山似蓬壺霞氣濃、涵波樓閣影重々、絃聲度水釵光閃、一曲清歌五本松

谷口廻瀾氏は松江中學校の教諭で、文章を以て鳴る、山村勉齋翁(元廣瀨藩文學)の第二子にして學殖が深い、

大哉登極典、億兆仰堯天、神勅炳如日、金甌萬古途
書哉追穀祭、靈氣蔽管宮、儼祀神如在、夜深庭燎紅
美哉豐樂殿、醴饌賜群臣、燦爛衣冠色、雲霞四海春

呈克堂若槻公

不問江湖與廟堂、一家清白守心腸、把君風格試相比、松柏凌霜百鍊剛

青垣派の副都統たる水谷虛堂氏は書を以ても聞えて居る、詩は其人の如く温潤だ

奉祝即位大典忝賦

連綿重大統、無缺古金甌、聖德與天一、恩光與日侔、蓬瀛開萬里、富岳聳千秋、何幸逢嘉典
嵩呼頌帝猷
宸服方登極、大嘗禋百神、豐穰薦新穀、黑白捧芳醇、皇典何深穆、寰區無等倫、微臣在僻陬
東鸞拜楓宸

石見と鳥取、眞の詩人

青垣派は大休師が主たるだけ、縹流の詩人が多くあるのも其特色だ、剪淞、青垣兩派以外、石見方面に一旗幟を翻へす二聖吟社は益田町を本據とするだけ、歌聖の人丸と、畫聖の雪舟とに因みて社名

としたのだ、その主盟山路石瓢氏は不幸最近に溘逝されたが、永く中學に教鞭を執り、斯界に功があつた、福羽美靜、森鷗外博士等を出した津和野町の産である。

鷹 島

蒼鷹一氣掠天飛、化作青螺對釣磯、莫是化翁棲息處、白帆紅日曉依微

松江雜咏

煙水蒼茫蘊萬家、夜舟舉網美魚蝦、篝且燈個々散沙岸、翠柳當樓鬢畫鴉

山中幸盛次克堂公韻

吐月山頭月影傾、千難萬苦盡丹誠、武名赫耀眞無比、人道尼家有孔明

秋晚雜興

薔花如雪動西風、雨後晴光喜野翁、何管藁人弓擬矢、晚禽來啄幾珠紅

初 冬

黃菊摧殘珠霰飛、却寒有策煖炉圍、高談渾洒酒中涌、宕跌風流抵夕暉

石見から飛んで鳥取縣に入ると、詩客は多いが平生之を示されぬ、余の知る中では、團野藏六翁(由良育英中學漢文數學科教授)橋本栗谿の兩翁と加島洗心氏がある、團野翁は橋本翁の推服される詩家だが、容易に作られぬ、最近の作に曰く

石見と鳥取、眞の詩人

恭奉賀登極大典

鳳舞鸞翔瑞靄中、盛儀登極紫宸宮、渾圓球上齊瞻仰、天壤無窮寶祚隆

謹奉賦大嘗大典

風雨隨時大有年、穀成悠紀主基田、亟民鼓腹傲華祝、黑白酒卮傳自天

眞に詩人たるは怕らくば橋本栗谿翁であらう、早く東京大學文科に學び西村天囚居士と同窓同學で卒業後各處の教職に就き、最後に山口高等商業學校の教授となり、罷めて後鳥取市に引隠して悠々自適されるが、書及び南畫を嗜み、殊に書は想ふに山陰に冠たるであらう、詩も亦忠厚の至誠に基くのが多い。

卿等動辭職、惟朕無辭職、綸言寸鐵徹肺肝、當路大臣無顔色、文臣愛錢武臣惜死、由來鮮矣身許國先皇在位卅五年、宵旰未曾一日息、興國泰平非偶然、列強環視有矜式、如聞堯舜之民以堯舜之心爲心、有君如此盍自飭、又聞豪傑之士雖無文王猶興、有君如此盍自力、嗚呼古今東西人君多、孰與先皇之盛德

紀元節

皇祖定中原、宏謨大典存、營宮安鏡劍、建極正乾坤、寶祚三千載、宸居九五尊、瞳々天日影、萬里照西蕃

天長節

何王復若我君王、一視同仁似太陽、恩及生魚皆得處、露沾草木各成章、雞林賓日瞻賜谷、星使浮槎拱帝鄉、興國泰平非偶爾、無窮聖運與天長

桃山陵

晏驚曾從稅六龍、亮陰周歲涕淚濃、中興大業無遺算、天佑皇圖有靖共、花落桃山春雨冷、月沈伏水濕雲封、微臣拜跪神如在、憶昔變興幸辟雍明治十八年十月上始幸大學僕方在學咫尺天顔故及

乙卯十一月十日恭賦

登極統元振羽儀、紫宸殿上晃朝曦、衣冠依舊欽天位、黼黻隨班奏壽詞、神璽有徵長赫奕、金甌無缺更雍熙、承明門外黃傘燦、瑞氣高颺萬歲旗

同十四日恭賦

祥風瑞雨不違時、嘉穀同莖九穗垂、嘗殿告年庭燎哲、齋官相禮玉笙吹、華纓長帶御悠紀、鬱鬱明燦薦主基、萬國仰瞻天子孝、千秋自有應乾儀

左の句は石川丈山の詩仙堂に題されたものであるが、以て其志尙を窺ふべきだ。
天子呼來不涉川、功名富貴付雲煙、倘知靖獻無行遜、未擬當年李謫仙
重厚右の如き以外、また左の作がある。

伯耆大山

突兀凌霄六千尺、居然不負中國背、山走西東水北南、白雲開合山逾碧

久官歸來八首(錄一)

久客歸來省故園、溫涼欲慰老椿堂、縱無棣萼葳蕤懿、尙有群兒似竹孫

松江松崎水亭十首

不酌枕山酌水亭、擬呼明月啓雪厨、雨聲乍到吟聲斷、唯見寒燈度水寒

誰以水亭爲醉亭、陶々可酌爲誰醒、銜杯長嘯不知曉、自訝前身是酒星

同人既去醉翁停。獨枕碧雲懷洞庭、氣象萬千何處是、夜山如夢落前汀

醉翁猶未賦歸舟、倚檻遙望新婦洲、曉色蒼茫天未曙、殘燈明滅水鄉秋

山陰の山水は概して温藉だ、詩も亦その風を受くるものか、然かもその数の多き恐らくは他に多く比はあるまい、茲には唯その二三を擧げるに止まる

第三十四 聖 德

生れながらの名君、明治大帝の御再現

余が松江へ来るべく内定して間もなく、拜別旁々山縣公邸へ推参した處、公は種々話談の末、容を憐めて、我皇太子殿下も過般芽出度御歸朝あらせ玉ふたが、扈從した役人が此頃來ての話を、殿下御洋行中の御事は實に悦ばしいことのみで、殿下は正さしく明治大帝陛下の御エライ處を享け繼がせ玉ふたことを知つて、皇室の御爲、國家の爲、洵に幸慶至極であるとして、左の事實を語られたが、公の双眼には露の玉が光つて見えた。

是れまで我皇族方の御洋行も稀れではなかつたけれど、皇太子殿下としては始めてなので、英國人中には、容姿共に皇太子に肖たものを渡航させるのだと言傳へて、我大使館でも、英國官邊でも、その打消しには相當苦心したといふ。

儲て我殿下が倫敦御着後に、英皇帝及び皇后兩陛下の御貴賓として、宮中に御泊りあらせ玉ふや、御舉止沈着で、兩陛下始め一統感に堪えさせられたが、倫敦市長が公式にギルド公會堂へ御招待申

上げた事に由て、一層殿下の御名譽が揚つた。

此公會堂は英國にも極めて由緒のある建物で、倫敦市長が茲で正式の歓迎を催ふことは容易でない、當日は我殿下を正賓とし陪賓に英の各皇族、元帥、貴族その他代表的縉紳八百餘人に及び、我大使その他も陪席したが如何にも晴れ々しいもので有つた。

一段高い黄金の椅子に凭らせ玉へる殿下の御前へ膝行した市長は、極めて古典的な正装をして、黄金製の函に納めた歓迎文を読み上げ、恭々しく函と共に奉呈した。

之を受けさせ玉ふた我殿下は、答辭を述べべく椅子を下りつゝ御前進あらせられた、當日は陸軍中佐の御正粧で、高い毛冠のある帽を御左脇に抱へさせられ、鹿の白皮の手袋を穿せた御手には、厚い烏ノ子紙に認めた答辭を持たせられ、兎もすれば捲き返るそれをばジツと御押へになつた上、玉音朗々として之を讀ませ玉ふ御聲は、宛ながら銀鈴を轉がす如く、八百餘人の列坐した廣い公會堂の隅から、隅まで透徹した、又其御態度の御立派なる、一統感に堪えて深く首を俛して最敬禮をした。

當時殿下は御年僅かに二十歳の御若さであらせられた、若も萬一殿下の御態度に御異狀でもあらせられてはと、心中實に大なる懸念に満ちた扈從者も、我大使以下の邦人も、何とも名狀し難い忝さに唯々安堵と共に躍り上りたい程悦んだ。

また此事が新聞紙に傳へらるゝや、殿下の御聲譽は彌が上にも高まり、歐洲大陸にも噴々傳へられたのみか、疑惑し居た英國人等も、釋然として而して却つて殿下を稱へ奉つるに至つた。


次で殿下が伊太利に赴かせられ、伊國皇室の貴賓として宮殿中に駐まらせ玉ふや、折節七月中旬で南歐特有の暑氣の爲、伊太利人は貴賤となく總て午食後三四時頃まで戸を鎖さして晝寢をする例なので、扈從員等は、今までは公私とも御多忙で、幾んど御寸暇だにもなかつた我殿下も、此機會に於て御休息あらせらるゝのが御健康上にも御宜しからんと其旨奏上すべく、御室へ伺候した處、殿下は頻りと萬年筆を走らせ居玉ふゆゑ、恐るゝ進んで右の次第を言上に及ぶと、殿下には莞爾として、卿等こそ疲勞したであらうから構はず休憩せよ、余は是れまで國許の兩陛下や弟宮達へ消息をと心掛けながら、彼此多用のため思ふに任せなんだゆゑ、今餘裕あるを幸ひ斯の如く消息文を認め居る處であると仰せられたので、その御孝悌の御篤いと御勉勵振りの貴さに扈從員は更に申上ぐべき辭だになくて感激しつゝ、罷り去つた。

尙御途次の艦中などでは、扈從員等血氣に任せて、種々の主張を爲すも、殿下には常に莞爾として誰の説は斯くあるけれど斯くするが宜かろうと一々御裁量遊ばされる、其事極めて肯綮に中り、且何等御立腹など成されぬ御鷹揚さは、全く生れながらにして君徳を備へさせ玉たので、是ればかりは學んで得べからず、模して到れぬ處だと、扈從員中の心ある者の只管感佩を禁ぜぬ所であつた云々。

初め殿下の御外遊と決するや、民間には時しも歐洲に君主大統領等高貴人を暗殺する共產主義者もあり、我殿下に萬々一のことあらばと憂懼の餘り、其御中止を請願し、或は爲に神佛に祈誓するもあり聞く所によれば、或る國士的の團體員の如きは、百餘人東京横濱間の鐵道上に枕を並べ、死して忠諫せばやとまで思ひ立ち、陸軍及び警視廳の大努力でヤット之を抑へたとも傳ふ、斯く憂慮し參らせた誠忠の人々も茲に至つて安堵と共に、一般國民と齊しく殿下の御偉大さを崇仰するであらう。

この殿下こそ今や我日本を知らし召しつゝある、山縣公の言の如く、洵に皇家國家の無上の幸慶である、余は彼の虎ノ門事件から、講演を諸處で試むると共に、多く此事實を申述べて、聽者の深い感動を催ふすが例である故、殊に記して以て思ひ出記を結ぶと云爾。

四十五年記者生活(終)

<p>發行所</p> <p>東京市日本橋區本石町 振替口座東京二四〇番</p> <p>株式會社</p> <p>博文館</p>		<p>昭和四年九月二十日印刷</p> <p>昭和四年九月二十五日發行</p>	<p>四十五年記者生活……奥付</p> <p>正價金壹圓八拾錢</p>
	<p>不許複製</p>	<p>著作者</p> <p>松井廣吉</p>	<p>發行者</p> <p>株式會社 博文館</p> <p>右代表者 取締役社長 大橋勇吉</p>

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
東京市小石川區久堅町百〇八番地
共同印刷株式會社印刷

江見水蔭 著

自己中心
明治文壇史

四六判布裝函入美本
口繪寫眞版數葉
總頁數五〇〇頁
正價金壹圓八拾錢
送料 十二錢

本書を讀まずして文學を語るなかれ！

何と言つても名高き文學者は明治時代に最も多い。紅葉・樗牛・乙羽・眉山・綠雨・花袋・一葉・子規・漱石・桂月・獨歩・小波等々其他幾百の文士あり。これ等の中には今直文豪として其の名赫々たるものも少くない。本書はそれ等文士の生活状態を赤裸々に書いたもので實によく明治の文壇がうかゞはれる。又あの小説は何時頃出版されたものだらうかと云ふ事も明瞭に知る事が出来る。實に本書は明治の文壇を網羅したるものにして讀書家は是非一度は見ておくべきものだ。

文學博士 高山樗牛遺稿

再訂増補

文は人なり

三六判全一冊
總洋布裝函入
正價 二・八〇
著者筆蹟數葉
送料 一〇
紙數六四八頁

文學博士 姉崎正治編

『文は人なり』、意氣なり、生命なり。樗牛の文は、特に意氣の發揚、生命の鼓動なり。樗牛全集の粹を抜きて此の一篇を成し、此に加ふるに樗牛、嘲風二人が意氣感應の文通を集め、更に新發見の材料を補ふ。故に宛ら小全集の觀あり。

文學博士 姉崎正治編
『高山樗牛と日蓮上人』
四六判洋裝
正價 二・二〇
紙數四五四頁
送料 〇・八

齋藤隆三著 (安田鞆彦装幀)

近世日本世相史

全一冊菊判布表紙上製
函入総紙數一二八〇頁
正價五・〇〇送料・二四

江戸時代より現代に互れる世相研究の著

泰平の永續によつて圓熟せる平民文化を形成した江戸時代を前編とし、急激な國情の變化から比類なき社會狀態の混雜と進展とを觀た明治大正時代を後編とし、彪然たる千三百頁に近き大冊に近世三百五十年間の世相を活寫したのが本書である。思想の變遷、世態の推移、宗教の消長、風俗の轉化、工藝美術の進歩、時それぞれの都會の繁昌、交通の發達に伴ふ文化の移動、それから演劇も説き、音曲も論じ花街も寫す。實に多年この方面の研究に没頭せる著者の蘊蓄の披瀝である。何人も讀んで感興の湧くを禁じ得ない。

齋藤隆三著 (駿子龍端川)

畫題辭典

寒山拾得とか、虎溪三笑とか、聞き慣れた畫題、見慣れた圖であつても、意義出典となると案外わかるものが多い。かうした場合に之を知りたくも従來は簡便に檢出し得る書物がなかつた。本書は此要求に應じて出たもので、二千に上る畫題を選んでこれに丁寧親切な解釋を施し、古今名家の作例を擧げ、且つ有名なものは寫眞版として挿入してあるから一面に於て立派な古今名畫目錄ともなり繪畫に接する趣味を深からしめる。

四六判布裝函入478頁
正價 2・50 送料・18

東京帝國大學助教授
文學博士

石橋智信著

(イスラエル宗教文化史
上のメシア思想の變遷 改題)

メシア思想を中心としたる

イスラエル宗教文化史

全一冊大判總洋布裝
函入紙數八二〇頁
正價五・二〇送料・二四

文學博士
姉崎正治推薦
基督教思想の根本研究
見よ!!學位論文の公刊

宗教とは何、宗教文化とは何、何を命ちとしてそれ等は動いて居るのであらう……否、命ちの動き即ち宗教なのではなからうか? 命ちの心を榮えとしたのが舊約物語の宗教であり、命ちの亡びを獅子吼したのが豫言者の宗教であり、命ちの望みに「救世主」メシアの信仰が生れたのである。クリスト教發生の學的研究が即ち本書である。イスラエル宗教文化の命ちの記録が即ち本書である。切に必讀を祈る。

意志と現識としての世界

—は價眞の書本

東京帝國大學教授
文學博士 姉崎正治譯

シヨベンハウエル著

◇大阪朝日新聞評して曰く

斯道の學者姉崎博士の翻譯である。世には法螺を吹く人が多いが眞面目に斯の如き大冊を翻譯して國民の思想を肥す人は乏しい。記者は寡聞だが日本二千五百有餘年未だ斯の如き大翻譯があつた事を知らない。寔に國民にとつて難有結構な翻譯である。原書は素敵な名文で近い話がワグネルでもニーチエでも心酔して巻を捲ふ能はざらしめた者である。日本へシヨベンハウエルを傳へた人はケーベル老先生で其の教を受け、た姉崎博士が又獨逸でシヨベンハウエルを傳へた人である。記者の手許にある作を翻譯したのである。譯者其人を得た者と云はなければならぬ。記者の手許にある原書やハルデンの英譯と對照して見るとハルデンのよりは勝つても劣はしない。記者の私見として目明の人ならば須らくルツソのユミールとシヨベンハウエルとの本とは讀むべしと主張する者である。シヨベンハウエルは厭世哲學である。而も不可思議や此の本を讀んだ吾等は世界の勇者とならねばならぬと勇猛精進以て人生の寶冠を捉まんとするのである。世界は我が富衆也と落書滔々長江の奔流するが如く讀む者をしてにニーチエの云ふ通り呼吸も繼がせないものである。嗚呼シヨベンハウエルは哲學がさては藝術がこれ讀者の心一つである。

上巻 三冊 寫眞版口繪一冊
中巻 三冊 寫眞版口繪一冊
下巻 三冊 寫眞版口繪一冊
正價 三・四〇
送料 各冊 一・八

姉崎正治	姉崎正治	姉崎正治	姉崎正治	帆足理一郎	帆足理一郎	帆足理一郎	帆足理一郎	帆足理一郎	帆足理一郎
意志と現識としての世界へ	根本佛敎	宗敎と敎育	新時代の宗敎	婦人解放と家庭の聖化	宗敎哲學概論	社會文化と人間改造	戀	人間苦と人生の價値	聖き愛の世界へ
上中下								訂改	三訂
各七五〇頁	四七〇頁	六二〇頁	四二〇頁	四六〇頁	八五〇頁	四六〇頁	四六〇頁	四三〇頁	四七〇頁
定價各三・四〇	送料 二・四〇	送料 一・六〇	送料 二・〇〇	送料 二・四〇	送料 五・八〇	送料 二・四〇	送料 二・四〇	送料 二・四〇	送料 二・四〇

早稲田大學教授
帆足理一 著

信仰と研究を融合して人生哲學の究極を闡明せる大著

宗教哲學概論

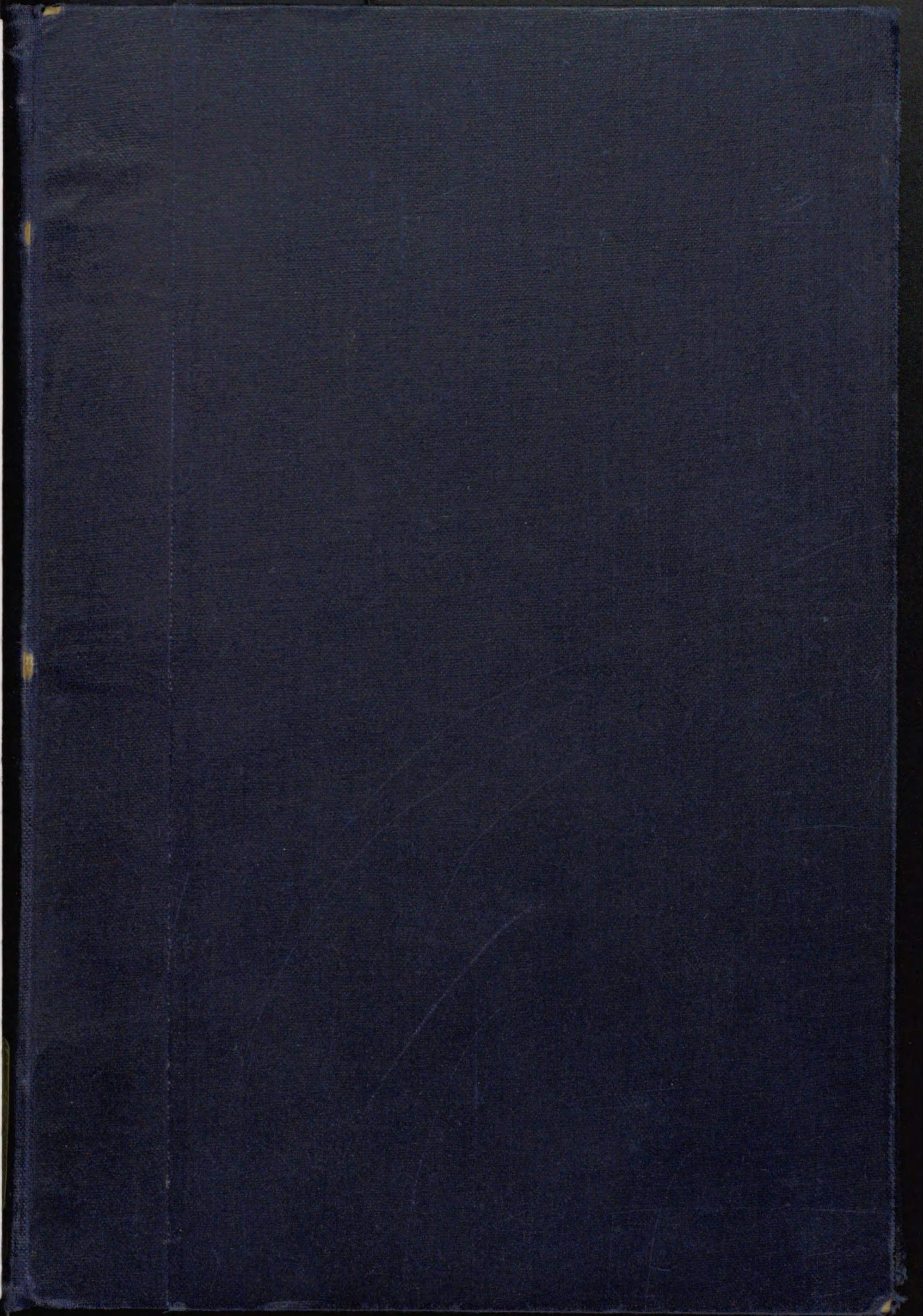
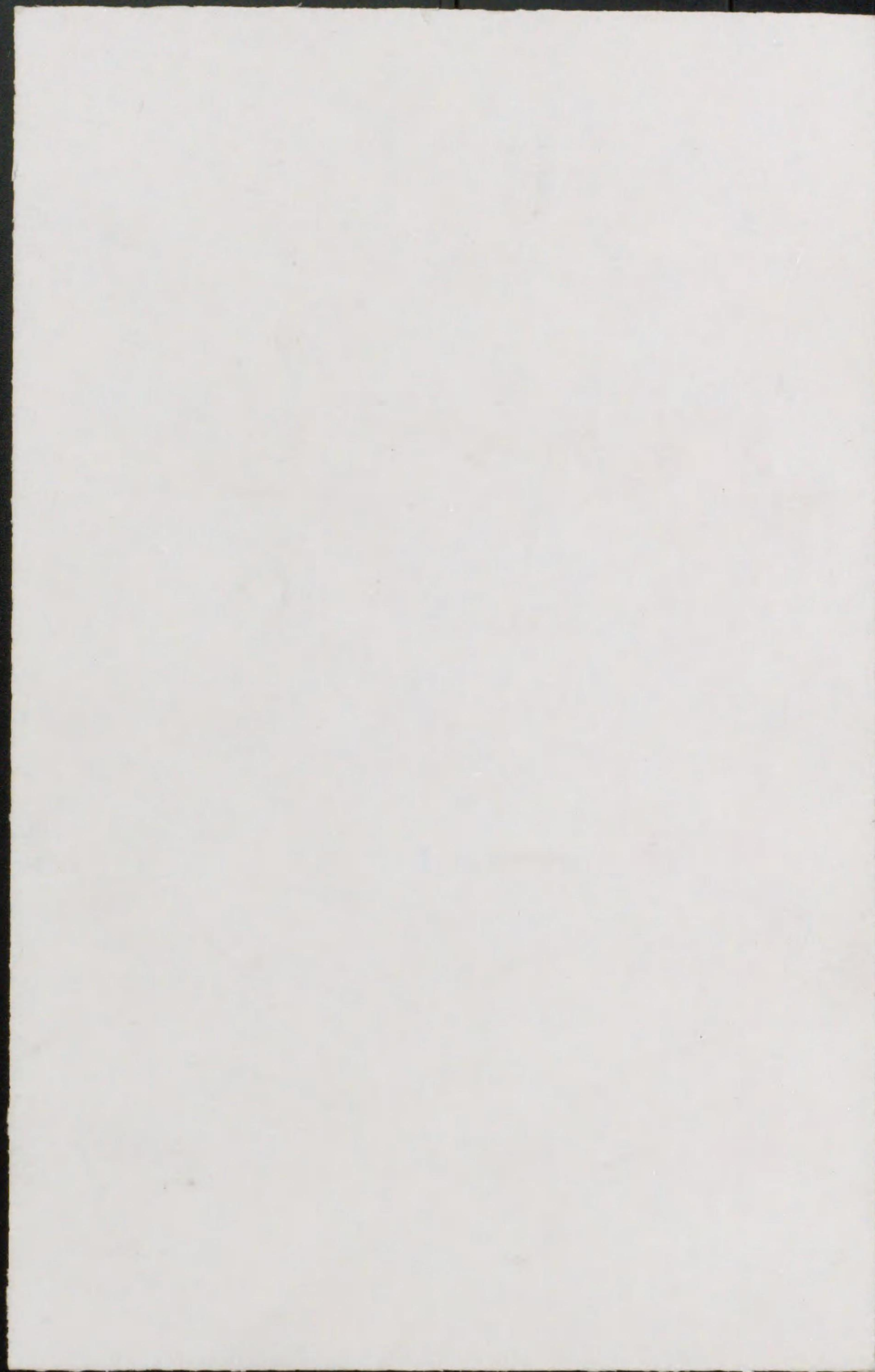
全一冊
菊判總布裝上製函入
全紙數八百五十二頁
正價・五八〇 送料・二四

本書は單なる論理の體形や概念の殿堂ではない。それは著者の體驗を基とした思索の結晶である以上宗教哲學であると同時に一個の人生哲學だ。著者の體驗は彼をして、宇宙人生に對して斯く思ひ、斯く語り、且つ又之を信條として今後の生活を指導せんと念願せざるを得ざらしめる。従つて本書は一個の學的努力であると同時に、著者の切實なる信仰の告白である。著者は本書の跋として附加した『我が信條』に基いて幾分にも行の世界に於ける彼の歩みを正してゆく事が出来るならば本書の價値はそれに依つて空しからぬ事を立證するであらう。

人生問題を
縱横に論評
せる姉妹著
書!! 五卷

◆三訂補 聖き愛の世界へ 全一冊 各冊共四六判
◆改訂 人間苦と人生の價値 全一冊 總洋布裝函入
◆社會文化と人間改造 全一冊 玻璃版小照入
◆婦人解放と家庭の聖化 全一冊 紙數各四五〇頁
◆戀 愛 論 全一冊 正價 二・四〇
各冊 送料 一〇

595
93

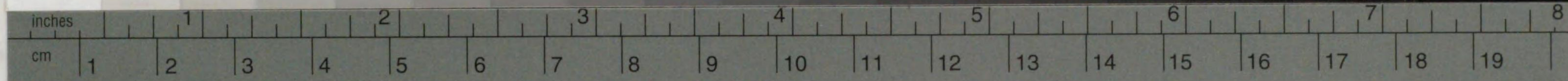


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

